

哀退した観光土産産業を復活にさせるには

(三条新聞合流点 平成二十九年十一月十六日(木))

県内外愛好者が育てた3千鉢。斎庭前に並ぶ大数咲き庄巻。全国から観光客五十万人との見出しで、多くの写真と記事で「弥彦菊まつり開幕」を三条新聞は報じていた。

菊まつりにオープンして多くの観光客でにぎわい、周辺にも効果が現れていたハズの「おもてなし広場・観光交流施設整備工事」は、五月の臨時議会で花井・安達・柏木・板倉各議員の賛成に対して、本多啓三議員の「一括発注で弥彦村と縁もゆかりもない業者が落札するような発注は到底容認できない」と反対。同調した本多高峰・田中・小熊・赤川各議員の反対で否決された。

備工事は村外業者のみの参加。一括発注の二億二千八百八万円に対して千六百一十万円(五、二%)増額、と三条新聞に載っていた。

ところで、観光と農業の一体的振興と新たなにぎわいの拠点として整備する「おもてなし広場の管理運営」を、村が観光協会に委託するとした方針に暗雲がただよい始めていることを、村民でもある会員の皆さんは知っていますか。

議会では任意団体の弥彦観光協会の法人化と「おもてなし広場の管理運営」を委託したいとの話があり、これに対して本多啓三氏は唐突な提案と批判したうえで、観光協会のある役員は九十九、九%ダメだと言っているとして受託することはあり得ないと断じていたとのこと。三条新聞のみだしも「本多氏 観光協会は任らない」でした。

事業を進めるには、事前に関係者に説明して意向を確かめることは常識です。ある程度の感触をつかんだ段階で公表するのが常で、初期段階から議員に細かに説明して顔色をうかがいながら進める必要があるというのでしようか。あなたが総務課長・副村長当時に、重要な施策が着手ありきで議会后を後回しにしませんでしたか。

選挙では「実務に精通した本多啓三」と呼び掛けておられました、行政マンとしての手腕に疑問を感じます。なぜなら、おもてなし広場整備工事の落札に関して、入札制度の主旨に反する私論をシヤア・シヤアと主張して再入札のやり直しをさせたごう慢なやり方です。現役時代は、法や規則を軽んじた自分流の仕事だったのですか。さて、受託の可否は理事会で採んでから臨時総

会に諮るのでしようか。知人の会員によれば、商工会員を兼ねている人が多く、飲食や宿泊など観光客と接する業種に対して、関わり方の少ない職域の人が反対しているそうです。

ほかの観光地は業界・地域・行政など一丸となつて知恵を絞り、あの手の手の対策で生き残りをかけています。私たちが弥彦村はどうですか。更なる発展を願う人達が前へ進もうとすると「協働」精神を欠いた一部の人の力で時間が止ってしまいます。

批判を承知で言います。おもてなし広場の管理運営は観光協会しかありません。弥彦観光で足りないものは「一貫した仕切り役」が不在だと感じています。その役を担うのが観光協会です。当初は広場の運営に苦勞が伴うでしょう。先例にとらわれず隠れた魅力の発掘

、季節別、目的別、対象別、体験型、他の地域との連携など各種イベント案の検討と、可能なものから実行して新しい魅力のある観光地、行ってみたい「やひこ」を県内外に発信することです。

知名度が上がればおのずと観光客は増え、集客力が備われば出店希望者も集まってくる。観光協会や関係団体の力及ばざる部分は専門とする人達から知恵と力を借りればよいと思いませんか。会員の皆さんは広い視野と豊富な知識、見識をお持ちの方が多数と思えます。弥彦村の衰退した観光産業を復活させるには何が必要か。そのため今なすべきは何か、観光協会の目的など総合的に判断をされることでしょうか。

しがらみのない協会になれるか。ガンバレ弥彦観光協会!(弥彦観光の復活を切に望む村民)